ボクとチイとたから島

参念　志郎

ボクが宿題で化学の研究をしていると、わが家のペットのネコのチイ（小さいからチイ）が紙をくわえてやってきました。

「きたない紙をひろってくるんじゃないよー。」

しかし、それはたから島の地図でした。地図は所々、よごれていてあまり読めませんでした。地図には１番から８番まで番号がところどころに書かれてあり、

「◎番が本物のたから箱」

と書いてあるのですが、よごれているため、かんじんの◎番を読むことができません。ボクはチイといっしょにたからをさがしに行くことにしました。

小さな船をかりて、島までわたろうとしたのですが、天気が悪くて海があれていました。大きな波でバランスをくずした時にリュックにつめこんでいた食料を全部、海の中に落としてしまいました。すると十ぴきの青い魚たちがいっぱい集まってきて、食料を集めてくれました。おれいに食料の中から半分を魚たちに、あげることにしました。

「ありがとうーーー。」

島に上がるとすぐに、小鳥がやってきて、ボクのうでにおりてきました。

「島の事ならおまかせー、ピーピーピピピー」

と、何だかみょうに調子がよい小鳥でした。小鳥の名前は、ピイと言って、ピイが道あんないしてくれることになりました。

ピイがぜったいに１番の場所に行くのがいいと言うので、１番に行くことにしてみました。１番は火山を半分のぼったあたりの、大きな木の生えている場所です。火山に行くとちゅうに森がありました。森はシーンとしていましたが、歩いているとなんだかカサカサと音がする気がします。立ち止まって聞いているとその音がだんだん近づいてきます。トラです。ピイによるとそのトラは夜はこわいけど、明るい時にはとてもやさしいそうです。今は昼前なのでだいじょうぶ。ピイとチイとボクは、トラに乗せてもらって地図に書かれている火山の大きな木の場所に行くことにしました。

火山を半分のぼったところに木が生えていて、その根元をほると、すぐにたから箱が出てきました。

「意外とかんたんに、たからを手に入れることができたなあ。」

と、言いながら箱を開けると、中には大きなリモコンが入っていて、黄色と赤色と青色のボタンがついていました。何なんだろうかと思って黄色のボタンをおしてみると、

「あと十分で火山がバクハツします」

とリモコンからけいほう音がピーピー鳴り始めました。トラに乗ってにげ出しましたが、とちゅうで火山から黒いけむりが出てきます。そのけむりが空をおおい、太陽がかくれて、あたりが真っ暗になりはじめました。するとトラが暗くなるにつれて、だんだんきょうぼうになりはじめています。

「ガルルルル」

あわててトラからとびおりて、にげてみたものの、すぐにがけがあって、その下には海があります。

「もう、どうしようもない、とびこもう！」

と、思い切ってとびこみました。

ボクは泳ぐのがとくいなので、向こうにあるすなはままで泳いで行けそうです。でも、チイは泳ぐのがにがてです。ひっしに泳いでいくらか進むと、今度は海にきょだいなオオダコがいて、オオダコの手にチイがつかまれています。

「チイ！！」

助けてあげたいけど、あと７本ある手がボクの方にものびてきました。

「もうだめだ」

と、思ったその時です。島にわたるとちゅうでエサをあげた十ぴきの青い魚たちが集まってきて、いっせいにオオダコをこしょばしました。オオダコは悲鳴をあげながら大わらい。そのいきおいでチイはむこうのすなはまに投げ出されました。オオダコはわらいが止まらず、黒いスミをすなはまに向けてふき出しました。すなはまには何か数字がえがかれました。

数字は「３」です。

「８本足のタコが３をふき出したんだから、８ひく３で、きっと５番のたからが本物だよ！」

と、チイがボクに言いましたが、ボクにはあまり信じられませんでした。ボクは言いました。

「すなおに３番でいいんじゃないかな。」

チイと５番に行くか３番に行くかでもめていると、さっきのトラがますますきょうぼうになって、こちらに走ってくるではありませんか。

「きっと、青がぼくたちのラッキーカラーだよ。リモコンの青ボタンをおすんだ！」

と、チイが言うので、青ボタンをおすと、なんとリモコンから光が出てきました。ピカピカッ！その光をトラに当てると、トラは急にやさしくなり、またボクたちをのせて、歩き出してくれました。

話し合って、けっきょく５番に行くことにしました。５番は池の所です。池につくとワニが池を守っていました。

「たから箱は池にしずんでいる。オレのクイズに正かいしたら、たから箱をとってきてあげよう。８引く３は！！！」

あまりにかんたんすぎて、かえってゲキムズです。ボクが思わずすなおに「５」と言いかけると、チイが

「５番にワニ・・・８引く３、ワニ！」

と、答えました。「セ・イ・カ・イ」。どうやらワニはダジャレずきだったようです。

たから箱を開けると、キラキラと光る色とりどりのダイヤモンドが百こと、なぜか小魚の肉をほしたものが入っていました。ピイはよろこんでほし魚を食べました。すると、小鳥だったはずのピイがグングン大きくなって、ヘリコプターぐらいの大きさのオオワシにへんしんしたのです。オオワシはたから箱を両足でつかんで空にとんでゆきました。

「まさか、ピイがー！何でー！」

と、チイとボクはオオワシにさけびますが、オオワシは

「ガァーガガガァーガァーガガガガガ」

と、言いながらどんどん遠くににげていきます。オオワシは火山をこえて、むこうがわに行ってしまいそうです。

「そうだ、こうなりゃ、さいごの赤ボタンをおすぞ！」

と、ボクは決心し、リモコンの赤ボタンを思い切り力を入れておしました。

オオワシはちょうど火山のま上をとんでいます。今度はボタンをおして１秒で火山が大ばくはつしました。オオワシはつばさに火がつき、ビックリしてたから箱をはなし、森のおくへと落ちてゆきました。たから箱はゆっくりと火山のふもとへ落ちてゆきました。

ボクたちは、そのたから箱をひろって、船に乗って帰ることにしました。トラにもダイヤを一つ、分けてあげました。このダイヤは夜でもきらきら光るので、トラはこれをつけているとずっとやさしいままです。帰りの海はおだやかで、十ぴきの青い魚が見送ってくれました。ボクは魚たちにブルーのダイヤモンドを一つずつあげました。

ふしぎな気分のまま、家に帰りました。ダイヤモンドは売ってお金にかえました。ブルーのダイヤモンドが一番高く売れました。お金は半分を化学の研究のために使って、半分はちょきんにしました。しょうらい、何に使おうかな。ボクは、

「それにしても、さいしょに、赤色のボタンをおさなくてよかったね。」

と、言いました。チイも、

「ボクがほし魚を食べたらどうなっていたのかな。」

と、言いました。

「いやいや、さいしょに赤ボタンをおしたらどうなっていたのかな。」

・・・・・それは―――。